# 楡家の人びと

北杜夫

新潮社

# 楡家の人びと

昭和三十九年四月五日　発行
昭和四十七年二月二十日　三十九刷

定価　八〇〇円

著者　北杜夫
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号　一六二
電話東京(〇三)二六〇一一一一番
振替　東京　八〇八番



(乱丁、落丁のものは本社宛てお買求めの書店にてお取替えいたします。)



印刷　大日本印刷株式会社　製本　神田加藤製本所


© 1964 Morio Kita.　Printed in Japan

第一部……五
第二部……一七三
第三部……三六一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 楡家の人びと

# 第一部

## 第一章

癩病院の裏手にある賄場は昼餉の支度に大童であった。二斗炊きの大釜が四つ並んでいたが、百人に近い家族職員、三百三十人に余る患者たちの食事を用意しなければならなかったからである。

竈の火はとうにかきだされ、水をかけられて黒い焼木杭になった薪が、コンクリートの床の上でまだぶすぶすと煙をあげていた。しかし忙しく食器を並べている従業員の誰も、そこへ行って燻っている薪を始末しようとはしなかった。そんなことにかまっている暇もなかったし、なによりもそこは伊助爺さんの領分だったからだ。彼はもう十五年この病院で飯を炊いていて、おまけに御多分にもれぬ一刻者、ちょっとしたことでも他人に嘴を入れられることは容赦できない臍曲りだったのである。

その伊助爺さんは、充分にみんなをじらしておいたうえで、やおら大釜のぶ厚いふたを取りはらった。すると熱気のこもった炊事場の空気のなかに、もっと火傷するくらい熱く、ねばっこく、親しみぶかい湯気が濛々と立ちのぼった。爺さんは櫂のような大しゃもじを両手に取りあげると、ざぶりとバケツの水に浸し、ふっくらと見事に炊きあがった大量の飯をかきまわしにかかった。釜の底のほうの飯を持ちあげるには、小柄な伊助は木の踏台に乗らねばならなかった。そうやって飯をひっくりかえしている彼は、かなりのせむしであった。前かがみになればなるほど、その背中の隆起した瘤はふくれあがってくるのだった。しかもその服装がまたよくない。少なくとも賄いをあずかる以上もっと清潔であるべきなのに、その着物はすっかり黒ずんでいて縞模様も定かでなかった。厚ぼったい前掛も同様である。手にも顔にも煤がこびりつき、要するにまっ白に炊きあがった飯とはまったく対照的な存在といえた。この黒く煤けた背の低いせむしの男が、独自の職人気質をむきだしにして一心不乱に飯をかきまわしているさまは、どことなく奇怪で、いくぶん滑稽な光景でもあった。その身な

り風態のため、彼は実際の齢よりずっと老けて見えた。本当はまだ爺さんと呼ばれるのは気の毒な年齢だったのに。

伊助に清潔な身なりをさせるためにこれまで試みたさまざまな企ても、結局は徒労に帰した。彼が言うのには、自分には自分のやり方があり、着心地のわるい上っぱりなんぞつけた日には、まっとうな飯は炊けっこないというのだった。院長先生さまがぴんとした髭をおったてなさって、まっとうな診たてをなさるのとおんなじことだ。わしの強情は親ゆずりだ。死んだ兄貴だってわしとそっくりの気性でな。

といって、伊助がもっと皆を困らせたのは予防注射のときである。彼は職務上まっ先にチフスだのコレラだのの注射を受けねばならないのだが、そんな妖しげなものを彼がおとなしくやらせるわけがなかった。そのうえ彼は大師さまを信じていて、自分にかぎり伝染病なんぞにかかるわけがないと主張するのである。考えた末、伊助が昼寝をしているところを抑えつけようとしたところ、彼はふいどしひとつのまま跣で逃げた。病院の下手は土地が一段低くなり、竹藪になっている。その竹藪の中に逃げこんでしまってどうしても出てこない。そんなわけで楡病院のこの飯炊きは、未だかつて一度も予防注射をしたことがないのである。

しかし伊助の炊く飯がとびきり上等で口当りのよいことは誰にしろ認めねばならない。この夏の米騒動以来、ときどき外米をまぜねばならぬので以前のような具合にはいかないが、楡病院の当主である基一郎院長が何回となく、「うちの病院の飯は日本一うまい」と讃めたえただけのことはあったのである。もっとも院長はなんでも「日本一」というのが口癖ではあったけれど。

伊助は、ほうほうと立ちのぼる湯気にまみれて手慣れた手つきで大釜の飯をかきまわし終ると、いつものように長く言葉をひっぱって、しわがれ声をだした。

「ほうれーえ」

これが合図であった。大勢の従業員がばらばらと寄ってきて、飯を容器に移しはじめた。むこうでは大鍋から汁をよそっている。アルミニウムの食器がかちゃかちゃ鳴る。下に車のついた配膳台が押されてくる。日に三度の、慌しくも活気のある光景なのである。

賄いはたしかに一面において楡病院の中心でもあった。そしてここのところ、大まかで単調な病院の菜にも思いがけぬ変化のあることが少なくない。この九月には寺内閣が倒れ、最初の平民宰相原敬があとを継ぐと、みんなの食膳には洩れなく尾頭つきがついた。なぜなら、この病院の当主である基一郎院長は政友会の代議士でもあったからだ。もっともごく小さな鯛で、若い書生たちは鰯でも食うように骨ごと呑みこんでしまった。そしてつい先ごろ、あれだけ執拗に頑張っていた独逸がついに屈服した。さすがのカイゼルも——カイゼルというと病院の関係者はどうしても院長の髭を思い浮べずにいられなかったが——とうとう へ

たばったのだ。

町ではこの戦争に半ば無関心であっただけに、なお一層ころげこんだお祭り景気を愉しもうという気分にあふれていた。日比谷公園には、戦捷祝賀の連合国旗に彩られた山形の大門が建ち、群衆は押しあって怪我をした。飾りつけはなかなかの見物であった。独逸軍国主義にひっかけた「軍国酒器」というこわれた大ビヤ樽もあったし、「炎千屍イ輪」(休戦平和)とかいうなんだか意味のよく通じない三間半の大イタチの造り物もあり、哀れな独帝が首を吊られている人形もあった。夜には提燈行列が出たし、昼には花電車が走った。こういうことは病院の誰か彼かが見物に行ってニュースをもたらすのである。すると病院を一歩も出たことのない婆やから患者から、いつの間にか自分自身でその光景を見たような気分になった。芝の附近で一台の花電車が火を発したのを見たのは、ちょうどそのころ病院に勤めるようになったばかりの少し足りない看護人であった。彼は最初の東京市内見物に出て、たまたまこの僥倖に行きあわせたのである。

「ほだらよう、アッと思うたらパチパチと火がでてよう、幕やら旗やらに燃えついてよう、蒸気ポンプがとんできただ、蒸気ポンプがよう」

すると、病院の中に小売店をだしている天理教にこった小母さんまでが、花電車というものは危ないものだ、桑原桑原、と言いだすのだった。

賄いの菜のことに戻れば、原内閣も独逸降伏も棚からボタ餅のことであったが、それに加えてもうすぐ楡病院の「賞与式」の日がくる。おまけに今年はこの青山に大病院を建ててから十五周年だという話だ。次には暮の餅つきがあって、正月がきて……と考えるのは、なにも大飯食らいの書生や看護人だけに限られなかった。

……むっと湯気のこもる賄いの外には、もう本格的な冬の凍えた空気がはりつめていた。腐りかけたブリキ罐に何杯もたまっている賄いの屑を二、三匹の穢ない犬があさっていた。彼らは近所の原っぱに巣くっている野犬で、追っても追っても性懲りなくやってくるのである。銀杏の大木は枝ばかりになって、それでも北風に立ちむかうような恰好で風呂場のわきに突ったっていた。浴場は院長自慢のものである。外観こそうす汚れ、壁際にうず高く積まれた石炭殻があたりの風景をいっそう寒々とさせていたが、内部にはタイルばりの大浴槽があった。浴槽の下には奇妙に渦を巻いた鉛管が走っていて、この湯こそ治療効果満点のラジウム風呂というのであったが、その秘密は院長しか知らない。しかし楡病院の入院案内書には、このラジウム風呂のことが特に一項目をもうけられて、ものものしい美文で説明されていたのである。

風呂場から少し離れて、小さいのや大きなのや、古いのや新しいのや、あまり上等とはいえぬ長屋風の家がごしゃごしゃと立並んでいた。これらは職員の住宅でもあった

し、数名からときには十数名もいる書生が住んでいる場所でもあった。基一郎院長がまだ本郷で開業していた頃から、郷里の出身者、あるいはほんのわずかな関係から、彼のところに食客となっている書生は数多かった。彼らは病院の手伝いをし、勉強をし、医師試験を受けて医者になっていった。現にいまの楡病院の医師、薬剤師の多くはこうした者から成立っていたのである。もっともいくら試験を受けても合格しない者もいたが、院長は彼らに相応しい仕事を世話してやった。もっとひどいのは、何年も飯を食べ、食べるだけでゆうゆうと月日を過している者もいた。いつの間にか行方不明になってしまう者もいた。だが、彼らを養うことは基一郎の道楽の一つでもあったのである。

楡基一郎は決して怒らない、あるいは怒った気色を露ほども顔に現わさない男である。誰にでも愛想がよかった。もっともこの愛想のよさは多分に調子のいいことであり、ときにはお世辞そのままに上すべりに響いたが、ともあれ院長は猫にだって誰にだって愛想がよかった。

あるとき、ぐうたら者で有名な一人の書生が、どうしたわけか朝早くから病院の玄関の廊下に立っていたことがある。ただなんとなく立っていたのである。彼は常々自分は医者になる勉強をするために東京に出てきたのであり、楡病院の廊下を掃くために存在しているのではない、と広言していた。そのくせべつに勉強をするわけでもなかったから、仲間からも蔭口を利かれるし、内心いくらか気に病んでいたらしい。それでも誰がふき掃除なんかするものかというくらいの顔をして廊下に立っていると、そんな朝っぱらから院長がやってくるのが見えた。基一郎は近づいてくると、実に愛想のよい笑顔を見せて声をかけた。

「いや、ご苦労、ご苦労」

それがあまりにも優しい口調だったので、同時に基一郎はすこし顔を上むけて頤でものをいう癖があったので、書生は半分気がとがめ、半分腹を立ててこう言った。

「ご苦労って先生、ぼくはなんにもしちゃいないのです」

「いやいや君、朝早くからそうやって廊下を歩いていてくれると、病院には活気がでる。いかにも繁昌しているように見える。いや、ご苦労ご苦労」

こんな話はざらにあるが、基一郎にしてみればそれは皮肉でもなんでもなく、本当に心底からそう思っていることは間違いなかった。

風呂場の横手にごしゃごしゃと立並んでいる家々は、必要以上に楡病院に居住している人々のためであったが、楡家の娘や息子や女中たちの住いもやはりその中にまじっていた。要するに大変な大世帯なのであり、無理に建てまされたり改造されたりしていて、いかにも雑然としているのはやむを得なかった。あながち壮麗という言葉を使っても言いすぎではない楡病院の正面からの景観にくらべると、この病院の裏手、賄いから始まって大浴場と何軒もの家屋が密集している地帯は、なんだかうらぶれた大都会の裏町



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のように見えた。

その中でいくらかましに見える二階建ての普請が、院長夫妻をのぞいた家族の家屋であった。それなら院長は一体どこに住んでいたのか？　それは「奥」であった。楡病院の正面のまるで宮殿のような大理石造りの建築――と初めて見る者は誰しも思った――の右半分は患者のための特等室になっている。しかし左半分は、事務室や待合室や外来用の診察室もあったけれど、なお廊下を辿ってゆくと、そこから先はみんなが「奥」と呼んでいる院長夫妻の住む特殊な部屋々々なのであった。病院の一々名前も覚えられぬ従業員たちの中でも実際に「奥」を知っている者は数少ない。大廊下をしきっている黒ずんだどっしりした扉から先は勝手に出入りを許されず、「奥」づきの女中が用を弁じた。「奥」にはいわば紫の雲が漂っていた。なんでも洋式の「すんばらしい」便所や、独逸から院長がわざわざ持帰ったダブルベッドとやらが具えてあり、壁は女心も男心をも誘うようなピンク色に塗ってあるそうだ、と病院の下っ端の連中は噂した。院長先生はお子さんさえ裏に住まわせている、あんなに沢山の広い部屋があんなさるのだから一緒に暮されたらよかろうに、というのは初めてこの病院に勤めた者がたいてい一度は抱く感慨であった。

その「お子さんたち」の住む裏の二階屋の階下からは、そのとき単調な子供っぽい節まわしの唄がきこえていた。一方の声はかなり甲高いまだ小さな女の子のもので、もう一方のはずっと年寄った女の、疲れたような眠たげな調子っぱずれの声であった。

青山墓地から　白いオバケが三つ三つ
赤いオバケがみっつみつ
そのまたあとから　袴はいた書生さんが
スッポンポンのポン

そうやって遊んでいるのは基一郎の三番目の娘桃子で、今日は日曜で学校は休みなのである。相手をしているのは下田の婆やで、肥満した、いかにも柔和そうな、自分の子供を犠牲にしても主家の子女を大事にする、一昔まえの典型的な乳母といってよい女なのだ。

かつて下田ナオは東京帝国大学附属病院の看護婦養成所を優秀な成績で卒業した。それから日本赤十字病院に勤めた。そのまま勤めていたなら彼女はとうに主席看護婦の地位に近づいていたかも知れない。しかしナオは不幸な結婚をした。不実な男は逃げ、残された小さな男の子は栄養不良で死んだ。そうした彼女を楡家に連れてきたのは基一郎である。同郷のこともあったが、院長は以前からナオの素質を見抜いていたのである。彼女は本郷時代の楡医院に勤め、青山に移ってからも楡病院の看護婦長を勤めた。しかしやがて彼女は、病院の勤務よりも、もっと楡家に親しい存在、家族の中に溶けこむというよりほとんど家族以前の

存在になった。つまり彼女は乳を与えない乳母になったのだ。基一郎の妻ひさが病弱だったところから、実母に代って長女の龍子の世話をし、次々にあとから生れてきた四人の子供をすべて手塩にかけた。今となってはナオはとうに楡家にとってかけがえのない女中頭であり、まるで百年も昔からこの家に根をおろしているとしか思えない「下田の婆や」なのであった。といって彼女はべつに主みたいな年寄りではなく、この年ちょうど五十歳だったが、更に附言すれば、当時は人生五十年といえば上の部に属していたのである。ナオが院長夫人ひさ、つまり「大奥さま」と同じ年齢だったこともなにかの因縁なのかも知れなかった。

桃子は近所にある青南小学校の五年生で、まだ女としての顔立ちの見通しは判然とはきかないが、それでも姉たちにくらべて遥かに器量が落ちていることだけは断言できた。鼻は丸まっちいといってよく、頬は下ぶくれしすぎていて、目はくるくると愛嬌よく動いたが、いささか愛嬌がありすぎた。が、そんなことは彼女の責任ではなかったし、自分が姉たちより病院の誰彼にずっと人気のあることを彼女はよく知っていた。桃子はかなりおませのくせに、とんな子供っぽい遊戯にも夢中になる性格で、小鼻のわきに汗までかきかねない熱中ぶりだった。

「せっせっせ」と、彼女は息をきらして合図をするのである。そして唄にあわせて、相手と交互に掌を打合せた。

青山墓地から　白いオバケが……

この遊戯は、「スッポンポンの」というところで腕組みをするように腕を組合せ、最後の「ポン」でジャンケンをする。桃子は下田の婆やを負かしに負かし、ますます活気づき、婆やがいい加減へこたれているのにいっかな止めようとしなかった。

かたわらでは、長火鉢にかけられた小鍋がぐつぐつ煮えていた。それは流感で隣室に寝ている桃子と二つ違いの弟のための粥であった。桃子たちは平生はやはり賄いの御飯を食べた。もっとも菜の少ないときは別におかずを与えられたけれど、「奥」をのぞいては楡家の家族はみんな賄いでできる食事をとっているのだった。彼らの食事は病院の配膳が終ったあとになるので、大抵ずっと遅くなる。

しかし桃子は遊戯に夢中で、もうお昼でかなり空腹になっていることなどまるで念頭にないらしかった。

袴はいた書生さんが　スッポンポンのポン

「ちえっ、なにがスッポンポンだい」

と、唐紙ごしにむずかる声がした。楡家の末っ子米国の声である。

「ぼくのお粥まだ？　こちとら、もうてんでお腹がすいちゃったい！」

米国は上の姉たちが聞いたら目をむいて小言を言いそうな文句を吐きちらかしたが、そのあと犬が遠吠えするように咳きこんだ。この年猖獗を極めた悪質のスペイン風邪にものの見事に彼はやられているのだ。そしてこの末の子は腺病質の気味があり、たとえ何も流行していなくてもすぐに風邪をひくのは例年のことであった。

米国とはまた途方もない名前だが、これは基一郎の多分にはったり気味のハイカラ趣味である。桃子と六つ違いの兄は欧洲といった。基一郎がむかし独逸に留学する直前に生れたからである。次に基一郎がアメリカ漫遊を試みた年に生れたのが米国で、ベイコクではあんまりというので郷里の和尚の意見によってヨネクニとよませた。そればかりではない、長女の龍子にしろ次女の聖子にしろ、当時にしてはかなり風変りの尖端的な名前といえたが、実は楡基一郎という姓名そのものが自らのハイカラな感覚になって創造されたもので、彼が親から貰った名前は似てもつかない田舎じみたものだったのである。

その楡家の家族の中で一番平凡な名前をもつ桃子は、隣室でむずかっている弟の声を聞くと、とっさになにか応酬してやる言葉を考えた。なぜなら彼女は決して弟と仲が悪くはなかったものの、少なくとも下田の婆やに関しては仇同士なのであった。姉や兄は齢が違っていた。この年少の二人だけで婆やの取りっくらをするのである。夜、二人は一室に婆やをはさんで寝るのだったが、眠りながらも双方とも婆やの腕を片一本ずつしっかりと抱きしめていた。下田の婆やはといえば、そんなふうに争奪戦の間に挟まれ磔みたいに腕を引っぱられながらも、平気でたいそうの鼾をかいて眠りこけた。

しかし桃子は、弟をやりこめることを中止し、その代り前よりずっと甲高い声で歌いだした。

「せっせっせ、青山墓地から……」

下田の婆やは弱ったようだった。病気の米国も心配だったが、うっかり桃子の意志を無視して立っていってしまうと、桃子は急転直下泣きだす怖れがあった。彼女の泣虫は有名だった。つまらないことで実にたやすく泣きだすのだ。声はあまり立てず、その代り造り物みたいに大粒の涙をぽろぽろとこぼすのである。

ちょうどそのとき、がらりと格子戸のあく音がした。

「婆やさん、また新聞見せてもらえんかね？」

「あっ、ビリケンさんだ」

桃子は喜んで立上り、せっかくのジャンケンポンも忘れてしまったようだった。

ビリケンさんは新聞を声をだして読むのである。朗読するのである。しかも突拍子もなく面白い抑揚をつけて。たとえ内容はよく理解できなくとも、桃子にとってそれは楡病院という雑多で広範囲な機構から生ずるさまざまな愉しみの一つといってよかった。

ビリケンというのは一時流行した西洋人形の名称であっ

たが、それに加えてついこの間まで政権を握っていた寺内前首相の渾名でもあり、ちょっと頭のてっぺんが突出している人間は当時よくこの渾名を冠せられたものである。楡病院のビリケンさんもまた、イガグリ坊主の頭頂がおあつらえむきにとがっていた。彼はもう何年も病院にいる施療患者の一人で、どこかわからないが確かに脳がわるいということだった。楡基一郎は昔は内科百般の医者であったが、独逸では主に精神病学を修め、帰朝してからは脳を病む患者をあつかいだした。青山に新病院を建設してからは、門には二つの看板がかけられた。一つは以前からの『楡病院』であり、もう一つは『帝国脳病院』という名称である。現在では実際のところ、結核をはじめとする各種の病人もいることはいたが、入院患者の主流は精神病の人たちが占めていたのである。

もっともビリケンさんがどんなふうに脳がわるいのかは、桃子はもとより下田の婆やにもわからなかった。もうずっと以前から彼は病院内を普通に歩きまわり、配膳の手伝いをしたり植木を移すのを手伝ったりしていて、言動にしてもそれほど変っているとは思われない。もしかしたら新聞を節をつけて読むのが病気なのかも知れない、と桃子は思ったりした。

新聞は「奥」でもとっている。病院でも数種類とっている。それは娯楽室にまわされるが、古くなったのは更に下田の婆やのところに集められてくる。この二階屋でも長女龍子の夫、養子の「若先生」が新聞をとっているが、そういう古い新聞がすべて束となってここの押入れに積まれてあった。下田の婆やはこれをあとで屑屋に売るのである。

ビリケンさんはべつに新しいニュースを知りたいのでやってくるのではなかった。ときには何カ月も前の新聞を読むこともある。二、三日前の新聞にめぐりあうこともある。なんでも活字を読みあげるのが愉しいらしいのである。

彼はずかずか上ってきて、押入れから一束の新聞をとりだした。順序もなく積んであるのをいい加減につかむのだから、行きあたりばったりであり、どんな新聞、どんな日附にぶつかるかは仏さまだけが知っていた。

「ほう、こりゃ都か。こりゃ新しい」と、彼は呟いた。

その間に下田の婆やはすっかり煮えあがった粥の鍋を持って立って行った。しかしビリケンさんは、早くもいくらか声を震わせて読みはじめていた。

彼は「世界の上に未だ嘗て観られざる横浜市の祝捷行列」の記事を読んだ。なんでも、戦いは捷てり平和は来れりと高唱する在留外人を中心として、山車や花自動車や馬車があわせて百五十余、列の長さは三十余町にわたり、地球上の民族は敵国を除いて総て殆ど集まったというのである。次に彼はもう一枚の新聞をとりあげて、「安い米は当分食へぬか、正米も期米も依然として高し」と読みあげた。「米は来年には一石五十円はおろか七十円にもならう

といふ。そんな高い米を食はなくとも我等は愉快な生活ができるくらゐの意地あり、一月に一日や二日の米無日を実行するに何の苦があらん」

「それ、つまらない。もっとほかのをよう」と、桃子は鼻を鳴らした。

「あいよ。米無しデーはたまらねえからな」

ビリケンさんは気安く答え、今度は半分醤油のしみのある古びた新聞をひっくりかえしはじめた。

「世界に誇るべき大発明、天然色写真の完成、赤貧と闘へる発明家飯田湖兆氏」

と、彼は素敵な調子をつけて読み、桃子はなにがなしっとりと、着物の裾がはだけるのもかまわず、まるで男の子のように膝をかかえた。

と、廊下に軽い足音がし、同じように軽く障子があいて、基一郎の次女聖子がはいってきた。彼女は、そのだらしのない妹が見ても確かに羨ましくなるような様子をしていた。江戸紫の絵羽の金紗に朱の袋帯を立矢の字にしめ、その鮮やかな色彩は、彼女の血の気に乏しい肌の色をいやがうえにも人形のように見せていた。そして彼女が後ろむきになって障子を締めたとき、三つ編みにして輪にされた後ろ髪につけられた幅の広いリボンがゆらゆらと揺れた。聖子はもう流行おくれになっていたとはいえマーガレットに結うのを好んだし、またそれがよく似あったのである。桃子は一瞬、年下の弟がよくやるように、「ちえっ、いいなあ」とでも言いたげに口をとがらせたが、すぐにビリケンさんのほうに向き直った。自分もいつかはあのようなお召を着ることができようとはとても考えられなかったが、しょせんこの姉も自分とは種類を別にした人間であり、それを羨ましがったり憧れたりするのはお門違いであることを桃子はちゃんと承知していたからだ。

たしかに聖子は、誰でもちょっと目をみはらせるような娘であった。ほそ面で、色白で、そのうえ来春学習院を卒業することになっている移ろいやすい貴重な年齢でもあり、唇から頤の辺りには、まだ脆そうな少女のふくらみが残っていた。これが長女の龍子となると、母親ゆずりのもっと犯しがたい気品が具わっていたが、その顔は目に見えて縦にのびすぎ、鼻はいくらか鷲鼻となっていて、なにか冷やかな、いかつい印象を与えた。聖子はちょうどいい微妙な中間に位置していたといえる。もう少し龍子に近づけばどうしても親しみに欠けたであろうし、もっと桃子に近づけばこれは愛嬌のありすぎる堕落であったろう。そのため楡病院の誰彼はなにかにつけこう噂せざるを得ないのだった。そりゃあなんといったって、聖子さまが一番の別嬪さね。

その聖子は、新聞をひろげているビリケンさんを認めると、目にとまらぬほどかすかに眉をひそめ、決して行儀のよいとはいえぬ桃子の姿勢を見るともっと眉をひそめた。しかし彼女はただこう言った。

「龍さまはまだ？」
「龍さま？　お二階じゃない？」
桃子はもう一度、聖子の姿を見、さすがに羨ましげに「また出かけるの？」と口に出しそうになったが、しかし彼女はあやうくその言葉を呑みこんだ。「お出ましになるの？」と言わなければならないのだ。そうでないときっと姉は叱るにきまっている。桃子が物心がついてからの記憶にある聖子は決してそんな姉ではなかった。もちろん十三も齢の違う龍子から小言をいわれるのならこれは仕方がない。「奥」に閉じこもっている母親はあまりにかけ離れた存在であったし、龍子が桃子にとって姉というより母に近く感じられるのは自然のことである。しかし、かつては遊び友達であった筈の聖子までがへんにつんとして、自分より上の姉の味方に変じていったことは、どうしたって桃子には癪にさわることであった。学習院がいけないのだ、と彼女はわけもなくそう考えた。
乃木将軍が院長となって以来、平民の子女もはいれるようになった学習院の女学部に、さっそく龍子を入学させ、ついで聖子をもそこへ送りこんだのは基一郎の意図である。龍子は楡家にさまざまな学習院言葉を輸入し、基一郎はもちろんこれを嘉納した。はばかりのことを御不浄、お床をお床、蚊帳を蚊帳と呼ぶようなたぐいである。これはいかにもそぐわない、とってつけた、田舎者が東京の文明にあこがれるようなものであったが、基一郎の感覚では楡家にはこれが必要なのであった。なぜなら楡家は基一郎が一代で新しく創りあげ、なお創りあげつつあるもので、なんでもいいからほかと変った伝統みたいなものをかき集めたかったからである。学習院でも普通友達同士は「さん」づけで呼び、ときに「様」と呼ぶ。大名華族の子女は様づけで呼ばれるが、そうとわかれば基一郎が自分の家族に「龍さま」「聖さま」を持ちこませたのは当然のこととも いえた。
一方、ビリケンさんは、聖子がはいってきたとき多少逡巡したようであった。桃子なぞは嬢ちゃんで済んだが、聖子となるとこれはお嬢さまであり、かなり「奥」に近い存在となるからだ。更に龍子となればほとんど「奥」に直結した若奥さまであり、うかうか新聞などを読むどころではなかった。
しかし彼はもうすでに新聞を読みかけており、いったん読みだした以上、彼にとってほかのことは実に稀薄になってしまうのだった。
「写真界の驚異なる世界的大発明の天然色写真はわが同胞によって発明完成され……」
と、彼はつづけた。しばらくは口ごもるような声だったが、次第になにもかも忘れ、ときには高くときには低く、桃子がなにより愉しみにしている独特の抑揚をつけて読みすすんでいった。
「忝なくも梨本宮妃殿下には農展に於て現品の台臨を辱な



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com